情報公開文書

2023 年３月８日作成

Ver.2

臼蓋横靭帯と骨盤傾斜に関する研究

1、研究の目的と意義

人工股関節全置換術は良好な手術成績をおさめていますが、感染や骨折といった術後合併症があります。脱臼も術後合併症の一つであり、人工物の設置角度が難しいことがその原因の一つです。手術中、骨の形などを指標に人工関節の受け手であるカップの設置角度を決定しますが、臼蓋横靭帯もその指標の一つです。これまでに骨盤が前後に傾くと臼蓋横靭帯もそれに伴い、傾くため骨盤の傾きが強い症例ではカップ設置の指標とならないと指摘されていますが、骨盤の傾きと臼蓋横靭帯との傾きについての研究はわずかしかありません。そこで我々は骨盤の傾きと臼蓋横靭帯の傾きに関連があるか、またどのくらい骨盤が後ろに傾くと臼蓋横靭帯に平行に設置したカップが傾くのかを調査したいと考えています。この研究を行うことで臼蓋横靭帯と骨盤傾斜との関連が明らかになれば、手術後の脱臼を減らすことが出来る可能性があると考えています。

2、対象となる患者さん

2015 年６月１日から 2020 年 12 月 31 日までに当院で初回人工股関節全置換術を行われた患者さんで、手術を行った反対の股関節の軟骨が完全にすり減っていない方が対象となります。変形が高度な患者さんや以前に骨切りなどの手術を受けた患者さんは対象となりません。

3、研究の方法

手術前に撮影した単純Ｘ線とＣＴを用いて研究を行います。単純Ｘ線で臼蓋の形を振り分け、ＣＴで骨を指標に臼蓋横靭帯を決定します。ソフトウエアを使用し決定した臼蓋横靭帯に平行にカップを設置し、その臼蓋横靭帯の角度とカップ設置角度を測定します。また CT より作成したレントゲン画像から骨盤の傾斜を測定します。その後、統計解析を行い、臼蓋横靭帯の角度、カップ設置角度と骨盤傾斜の関連を調査します。

4、研究に用いる試料・情報

本研究では下記情報をカルテより収集します。また単純Ｘ線、ＣＴで下記項目を測定します。

患者背景：性別、年齢、身長、体重、BMI

画像検査（単純Ｘ線）：Sharp 角(術前単純Ｘ線)、 CE 角(術前単純Ｘ線)

画像検査（CT）：水平断・矢状断における TAL 前方開角、TAL に平行に設置したカップ前方開角、spinopelvic tilt、sacral slope、pelvic incidence、pelvic flexion angle

＊CT の解析は ZedHip(LEXI)ソフトウエアを使用

本研究で利用する情報について詳しい内容をお知りになりたい方は下記の「お問い合わせ先」

までご連絡ください。

5、研究期間

研究機関長の許可日～2024 年３月 31 日

6、外部への試料・情報の提供

該当なし

7、研究実施体制

この研究は長崎大学病院のみで実施する研究です。

≪研究責任者≫

長崎大学病院　整形外科　研究責任者名　小林　恭介

8.お問い合わせ先

長崎大学病院　整形外科　担当者名　小林　恭介

〒852－8501　長崎市坂本１丁目７番１号

電話：095（819）７３２１　　FAX　095（819）7325

【ご意見、苦情に関する相談窓口】（臨床研究・診療内容に関するものは除く）

苦情相談窓口：医療安全課　095（819）7616

受付時間　　：月～金　　９：00～17：00（祝・祭日を除く）